長崎原爆76年 被爆者代表・岡信子さん(92)

「語り継ぐ命ある限り」

一瞬で焦土と化し、罪のない多くの命が奪われた長崎。「核兵器は絶対にだめ」。切なる訴えは今年、核兵器禁止条約の発効に結実したものの、日本政府は背を向けたまま。核廃絶の実現はいまだ見えず、高齢化した被爆者らの焦りは募る。「長崎を最後の被爆地に」。世代を超え、平和を求める祈りの声が街に響き渡った。

(1面参照)

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典で、「平和への誓い」を読み上げる岡信子さん＝9日午前、長崎市の平和公園（代表撮影）

「私たち被爆者は命ある限り語り継ぎ、核兵器廃絶と平和を訴え続けていくことを誓います」。長崎市の平和祈念式典で、「平和への誓い」を読み上げた被爆者の岡信子さん(92)＝長崎市住吉町＝は、看護学生として救護活動に尽力した当時の体験を語り、核なき世界の実現を訴えた。

当時16歳で、大阪の看護専門学校の学生だった岡さんは、大阪大空襲で病院が爆撃されたため、長崎に帰郷し、爆心地から1・8キロの自宅で待機中に被爆。左半身にガラス片が刺さる大けがをした。「キュウゴシュットウセヨ」。日本赤十字社長崎支部から出頭を命じる電報が届いたのは、原爆投下から3日後のこと。母や弟も被爆し、けがをしていたが、「私は日赤救護員だから」と不安な気持ちを抑え、市内の救護所へ駆け付けた。

次々運ばれる患者 うじだらけの遺体

16歳 救護現場の記憶生々しく

動員先の新興善国民学校救護所は、衛生兵が「戦場でも見たことがない」と話すほどの惨状だった。3階建ての救護所に次々と被爆者が運ばれ、悪臭が立ち込めていた。亡くなる人も多く、女性2人でトラックの荷台に角材を積み重ねるように遺体を投げ入れた。苦しさのあまり、救護所から飛び降りる人もいた。胸から腹までうじだらけになった遺体を見て、思わず逃げだそうとしたが、「それでも救護員か」という衛生兵の声で使命感を取り戻した。

不眠不休で救護に当たりながらも、行方の分からない父のことが心配だった。脚の傷にうじが湧き、きりで刺すような痛みを感じつつ、暗くなるまで町中を捜し回った。途中、腹から飛び出した内臓を両手で抱え、ぼうぜんと立っている男性や、首がちぎれた赤ん坊に乳を飲ませようとする若い母親を見た。「もう私の体も限界だ」と思った時、時津国民学校救護所で、大けがをした父と再会した。

「お父さん生きていた！私、頑張って捜したよ！」と泣いて抱き付いた。

被爆者代表としては最高齢。「原爆の恐ろしさを伝えるために、この年まで生かされた」と語る。誓いには、「亡くなった被爆者の無念を伝え、若い人にあんな苦しいことをさせたくない」との願いを込めた。「私の後ろには原爆で亡くなった大勢の人々が立っている」と岡さん。平和を祈る犠牲者の声なき声を背中に受け、かみしめるように訴えた。

ミサの朝 静かに祈り

長崎市本尾町のカトリック教会浦上天主堂では9日早朝、追悼のミサが行われ、参列した信徒ら約200人が静かに祈りをささげた。午前5時半、ミサを知らせる鐘が長崎の町に響いた。4歳の時に被爆した同市の女性(80)は、目が痛くなるほどの閃光（せんこう）を覚えている。「原爆も戦争もいらない。政府には核兵器禁止条約にぜひ参加してほしい」と訴えた

平和な世界実現へ 高校生「人間の鎖」

爆心地公園で集会

世界に核廃絶を訴え署名を国連に届ける「高校生平和大使」や、署名活動に携わる生徒ら計約70人が9日早朝、長崎市の爆心地公園で集会を開いて原爆犠牲者を追悼し、「私たち若者の力で平和な世界を実現していく」と決意を新たにした。

長崎、広島を中心に19都道府県から過去最多の計35人が選出された今年の平和大使のうち、兵庫など8県の計約20人が参加。曇り空の下、原爆落下中心地碑を囲む「人間の鎖」をつくり、平和を祈念した。新型コロナウイルス感染対策のため、リボンを介して輪になった。

比治山女子高（広島市）2年、高橋菜乃果さん(16)は「核廃絶のためには、高校生を含め皆が取り組まないといけない」と強調。不二聖心女子学院高（静岡県裾野市）3年、土屋陽和さん(17)は「碑を囲んで祈りをささげた時、犠牲者の方々が私たちを見守ってくれているように感じた。今日感じたことを静岡で伝えていかなければと使命感を持った」と話した。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。